3　宇部の近世はどのような時代だろうか

◎学習課題
・この時代、宇部ではどのような政治のしくみができあがっただろう？
・江戸時代、宇部で産業が急速に発展した理由は何だろう？

		宇部のできごと	歴史上のおもなできごと
16世紀	室町時代 1573 安土桃山時代 1590 戦国時代	1551●大内義隆が家臣の陶晴賢に攻められ、ほろぼされる 1555●毛利元就が陶晴賢を倒す 1587-92●豊臣秀吉が九州の行き帰りに山中（二俣瀬に立ち寄る） 1600●毛利輝元、関ヶ原の戦いに敗れ、領地を長門・周防に減らされる	1543■ポルトガル人が鉄砲を伝える 1549■キリスト教の伝来（ザビエル） 1573■室町幕府がほろびる 1582■天正遣欧少年使節出発（～90） 太閤検地が始まる 1588■刀狩令が出される 1590■豊臣秀吉が全国を統一 1592■秀吉が朝鮮侵略を始める 1600■関ヶ原の戦い 桃山文化
1600	1603		
17世紀	江戸時代	1625●福原元俊が宇部村・川上村・山中村・小串村など8000石の領主となる 1645●藤曲沖で難破した幕府船の役人を救助した藤曲村民たちが、幕府から褒美として、銀子100枚をもらう 1690●江ノ内開作（藤山）が完成する 1693●鵜ノ島開作（鵜の島）が完成する 1697●常盤池の工事が完了し、通水を開始する 1699●浜田開作（藤山）が完成する	1603■徳川家康が征夷大将軍になる 1612■幕領ではキリスト教を禁止する 1615■豊臣氏ほろびる 武家諸法度・禁中並公家諸法度 東アジアに日本人町が栄える 1635■参勤交代の制 1637■島原・天草一揆（～38） 1641■鎖国の体制が固まる 千歯こき・備中ぐわなどが普及する 千鰯などの肥料が利用される 商業が発達する（大阪と江戸） 元禄文化
1700			
18世紀		1701●床波開作（西岐波）が完成する 1739●外開作（藤山）が完成する 1782●上開作・中野開作（厚南）が完成 1792●御撫育用水が完成する 1798●新川が完成する	1709■新井白石の政治 1716■享保の改革（徳川吉宗～45） 1720■禁書をゆるめる 1721■目安箱を設ける 1722■上げ米の制を定める 1732■享保のききん 1742■公事方御定書が完成する 木綿が広く用いられるようになる 問屋制家内工業が発達する 1772■田沼意次が老中になる 1782■天明のききん（～87） 1787■寛政の改革（松平定信～93）
1800			
19世紀		1806●伊能忠敬が宇部を測量する 1817●妻崎開作（黒石）が完成する ●岐波の船頭、三保喜左衛門がしばしば樺太に渡航する 1821●御撫育用水に辰ノ口隧道が完成 1831●長州藩、天保の大一揆 1840●亀浦の七右衛門・九十郎の向田兄弟が南蛮車を考案し炭坑に使用 1860●妻崎新開作（黒石）が完成する 1864●福原越後、兵を率いて京都へ禁門の変に破れ切腹 1866●福原芳山、幕府軍と戦う	1808■間宮林蔵が樺太を探検する（～09） 百姓一揆と打ちこわしが多発する 化政文化 1825■異国船打払令 1833■天保のききん（～39） 諸藩で改革が行われる 1837■大塩の乱 1839■渡辺華山・高野長英などがとらえられる 1841■天保の改革（水野忠邦～） 1853■アメリカの使節ペリー浦賀に来る 1854■日米和親条約　日米修好通商条約（1858） 1859■安政の大獄 1860■桜田門外の変 1864■幕府が長州藩を攻める（一次） 1866■薩長同盟が成立する 幕府が長州藩を攻める（二次） 1867■大政奉還　王政復古の大号令 1868■戊辰戦争（～69） 薩摩藩・長州藩が攘夷に失敗する
近世	1868		

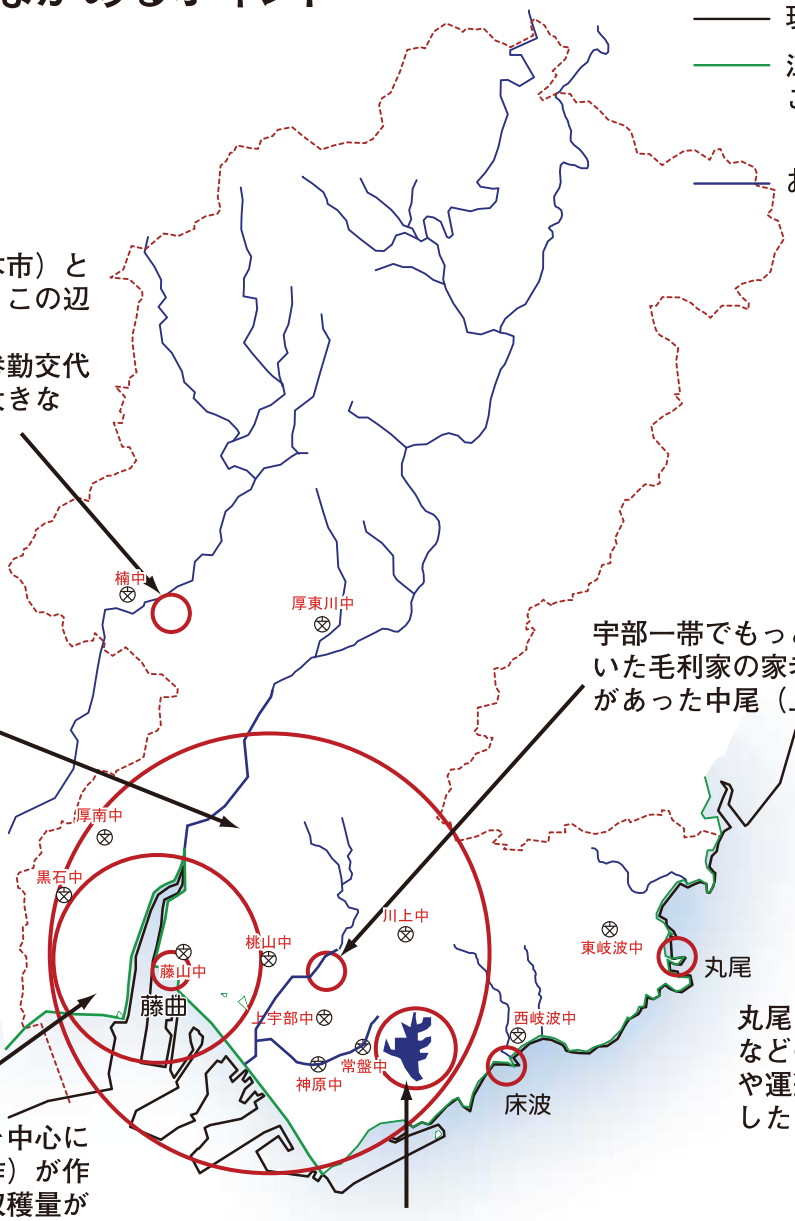
近世の宇部をながめるポイント

現在の市境
現在の海岸線
江戸時代終わりころの海岸線（推定）
おもな川

船木は舟木市（舩木市）と呼ばれ、江戸時代、この辺りの中心地でした。
代官所が置かれ、参勤交代の大名も宿泊する大きな町でした。

江戸時代にできた新田のための水を、ため池や用水路の建設によって確保していきました。

宇部一帯でもっとも力をもっていた毛利家の家老、福原氏の館があった中尾（上宇部）



丸尾・床波・藤曲などの港も、漁業や運送業で栄えました。

厚東川の河口付近を中心に次々と干拓地（開作）が作られていき、米の収穫量が急増していきました。

現在、常盤公園内にある常盤湖は、江戸時代、かんがい用に作られたため池です。

遠浅の海が次々と干拓され、開作がつくられました。
常盤池などのため池や、御撫育用水などの用水路も各地につくられ、新田開発が進みました。

作画　中山美由紀

（1） 長州藩の成立

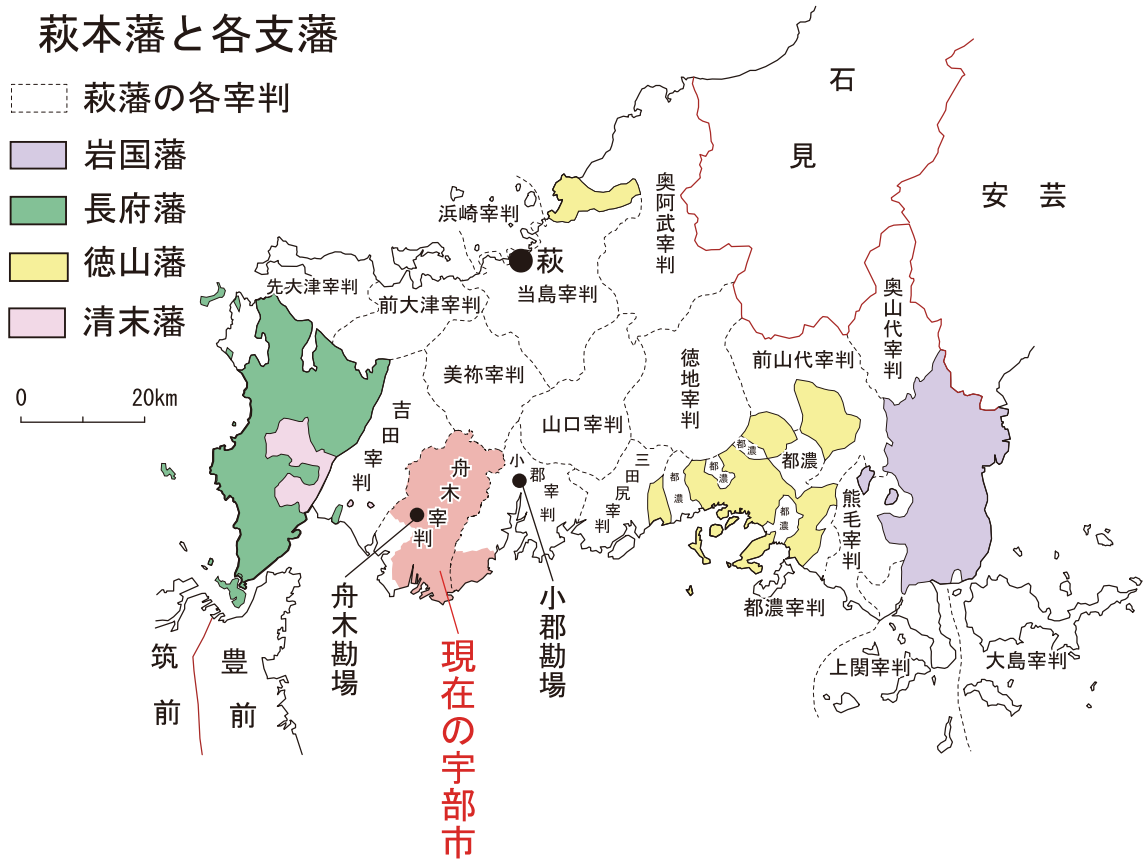
1600（慶長５）年、関ヶ原の戦いで敗北した西軍の総大将だった毛利輝元は、徳川家康によって中国地方８カ国にまたがっていた領地を周防・長門の２カ国に減らされました。

毛利輝元は萩に城をかまえ萩藩をつくり、領地のうち、いとこの吉川広家に３万石、同じくいとこの毛利秀元に３万6200石、次男の毛利就隆に３万1473石を与え、それぞれ岩国藩・長府藩・徳山藩としました。その後、長府藩から１万石が清末藩として分かれていますが、これらは萩藩を本藩とする支藩とされました。（ただし、岩国藩は正式には幕府から藩として認められなかったので岩国領と言うことがあります。）萩藩と各支藩の藩主は親戚関係であり、萩藩を中心にまとまっており、これらをあわせて長州藩とよびました。

（2） 長州藩の政治のしくみ

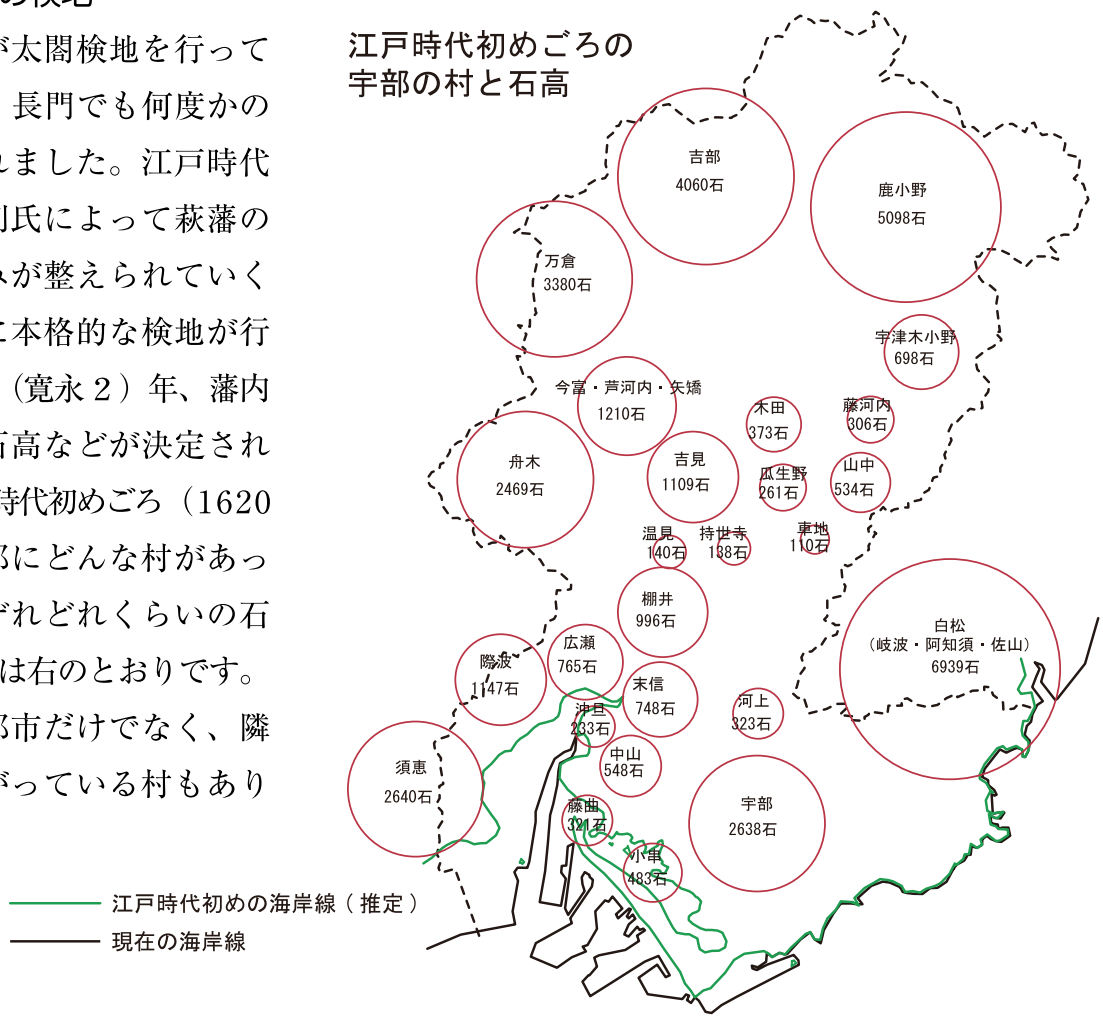
長州藩は萩藩と４つの支藩に分かれており、各支藩ではそれぞれ独自の政治が行われていました。萩藩は、領地を毛利本家の蔵入地（直轄領）と、家臣たちに与える給領地に分けました。萩藩内の村々は、複雑に蔵入地と給領地に分けられ、そこで暮らす人々は、蔵入地であれば藩主の毛利氏に、給領地であればそこを領地とする毛利氏の家臣に年貢を納めました。各村々は、地域ごとに宰判としてまとめられ、宰判ごとに蔵入地の管理が行われました。

下の地図のように、現在の宇部市は、江戸時代、萩藩の舟木宰判と小郡宰判の中に位置していました。舟木宰判には舟木に、小郡宰判には小郡にそれぞれ勘場（代官所）という役所が置かれ、萩藩の郡奉行の支配下にある代官が、宰判内の村々を支配しました。



（3） 長州藩の検地

豊臣秀吉が太閤検地を行って以来、周防・長門でも何度かの検地が行われました。江戸時代になり、毛利氏によって萩藩の政治のしくみが整えられていく中で、さらに本格的な検地が行われ、1625（寛永２）年、藩内の各村々の石高などが決定されました。江戸時代初めごろ（1620年代）の宇部にどんな村があったか、それぞれどれくらいの石高があったかは右のとおりです。（現在の宇部市だけでなく、隣の市とまたがっている村もあります。）



（4） 宇部の村々と福原氏

上にあげた宇部の各村々には、藩に直接支配されている蔵入地（くらいりち）と、毛利氏の家臣の領地である給領地がありました。村の中に蔵入地と給領地が混じっている場合もありましたし、村全体が蔵入地、あるいは給領地という場合もありました。

宇部に給領地をたくさんもっていたのは福原（ふくばら）氏です。宇部・山中・河上・小串の各村は、すべて福原氏の給領地で、白松（しらまつ）（現在の西岐波・東岐波・山口市の一部）にも3000石以上の給領地をもっていました。

この福原氏は、毛利氏の遠い親戚にあたり、古くから毛利氏に従ってきました。福原広俊（ふくばらひろとし）の時には藩主毛利輝元にあつく信頼され、長州藩の成立に深くかかわりました。その後、福原氏は江戸時代を通じて萩藩の永代家老（えいだいかろう）をつとめ、藩の政治の中心で働きました。1625（寛永２）年、藩内の各村々の石高などが決定された時に、福原氏は毛利氏から8000石の領地を与えられましたが、そのほとんどが宇部にありました。江戸時代の宇部の歴史と福原氏は切り離せない関係にあります。

福原氏は萩に屋敷をかまえ藩の政治の仕事をしていましたが、宇部にも屋敷をもっていました。その屋敷のあとが上宇部の中尾に「福原邸跡」として残っています。

（5） 勘場と御茶屋のあった舟木市

現在の宇部市（東岐波･西岐波を除く）と山陽小野田市のうちの旧小野田市域は、江戸時代、舟木宰判という行政区でした。（東岐波・西岐波は小郡宰判）その舟木宰判の行政の中心地だったのが舟木市です。

舟木市は、舟木宰判を治める代官の役所である勘場や、参勤交代の大名が宿泊する御茶屋などがあり、藩の重要な場所でした。また、勘場に年貢を納めたり、毎月３・13・22日には定期市が開かれるなど、周辺の人々も集まるこの地域の中心地でした。

今も残る舟木勘場の門

藩の郡奉行の支配下にある代官たちは、普段は萩に住み、担当の宰判に関する仕事をしていましたが、毎年春、秋、暮れには勘場に出向き、藩の直轄領である蔵入地からの年貢の徴収などを行いました。勘場には代官の部下として勤める武士や、大庄屋など宰判内の各村の代表者である農民たちも集まり、宰判内のさまざまな仕事を行っていました。

また、舟木市は山陽道の本宿（参勤交代の大名が宿泊する所）とされ、そのために藩は御茶屋を建てました。九州の各大名が参勤交代でここを通る時、大名はこの御茶屋に泊まり、家来たちは、舟木市の135軒の家に分かれて宿泊したと記録されています。

江戸時代の舟木市の絵図

左の絵図と同じあたりの
現在の地形図

今も江戸時代の町並みが残っていることがわかりますね。

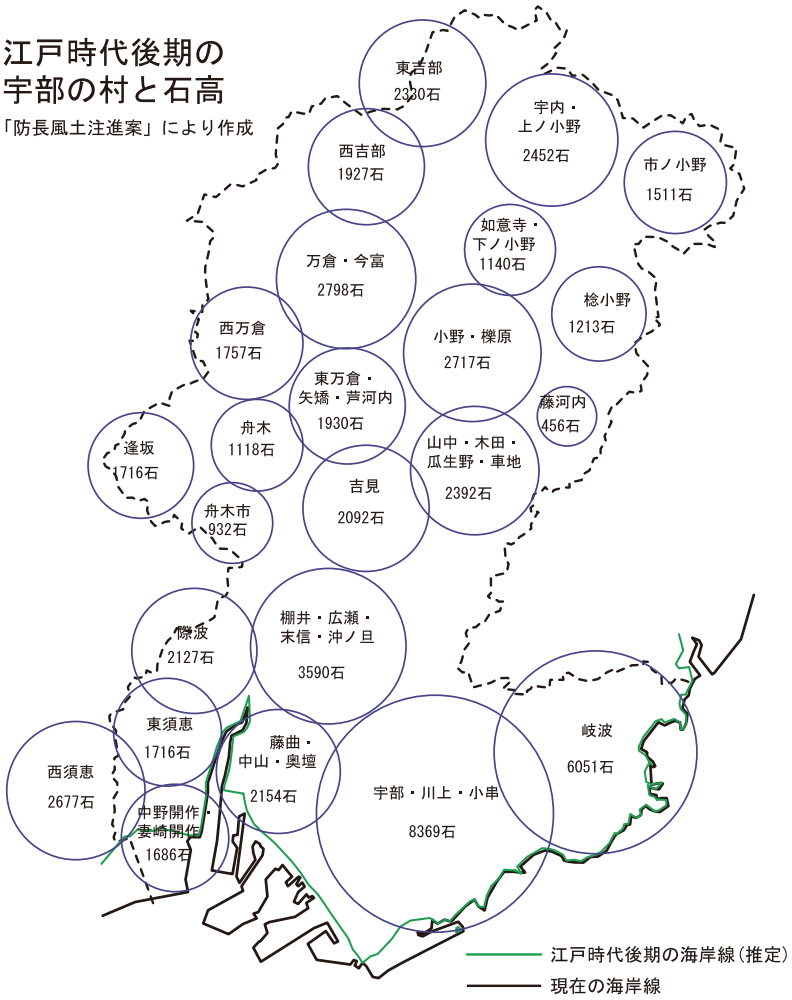
（6） 開作とかんがい

右の地図は、江戸時代の後期（1840年代）の江戸時代の宇部の各村と石高を示したものです。

石高とは田畑から生産される米を中心とした農作物の量ですから、各村での農業のようすがわかります。

前々ページの地図と比較してみましょう。村の名前や範囲が変わっている所もありますが、220年間でどう変化したと言えるでしょうか。

農具や農業技術の進歩や新田開発によって、ほとんどの村では石高が増えています。特に、沿岸部での石高の増加は著しいものがあります。



瀬戸内海沿岸ではさかんに干拓が行われました。長州藩では干拓地のことを「開作（かいさく）」と呼んでいましたが、宇部でも草江から厚南にかけての浅瀬が次々と干拓され、開作になっていきました。今まで海だった所が、次々と新田として利用されるようになったのです。

江戸時代以前、厚東川河口の西側にあたる厚南平野の大部分は厚東川の河口にあたる海で、東側にあたる草江から藤曲にかけても砂州によってつくられた深い入り江になっていました。この砂州は、戦国時代ころ、嵐の日に一夜にしてつくられたと伝えられていますが、厚東川や真締川の流れが砂を運んでつくったものと思われます。その後、沖の山と呼ばれたこの細長い砂山には松の木が植林され、有名な天橋立（あまのはしだて）にも似た美しい風景をつくっていたそうです。それまで瀬戸内海に真っ直ぐ流れ込んでいた真締川は、この砂州によって大きく西の河口（現在の藤山交差点の辺り）まで流れることになりました。

こうした宇部の沿岸部の地形が、江戸時代の開作建設によって大きく変わることになります。

開作をつくるとかんがいの必要もでてきます。もともと海だった場所ですから川などありません。そこで農業をするためには多くのため池をつくったり、用水路の建設も行われました。また、低地につくられた開作は、ちょっとした雨でも洪水になってしまいますので、排水路の整備も重要な課題でした。

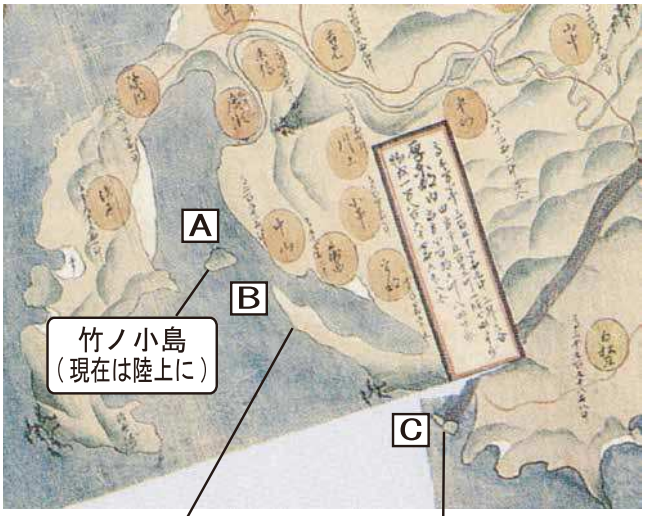
●開作された土地を確認しよう！

右の地図は、1605（慶長10）年ころに作られたものです。現在の地形図のように正確ではありませんが、江戸時代が始まったころの宇部の沿岸部の地形がよくわかります。特に犬尾（いぬのお）（現在の居能（いのう））を先端とする砂州は、当時の特徴的な地形でした。今でも宇部線の南側は、この砂州の名残で土地が盛り上がっています。

また、下の地図は、江戸時代の間に造られた開作と、おもなため池や用水を表したものです。２枚の地図を比較しながら、開作された土地を確認していきましょう。

比較の目安になるようＡ・Ｂ・Ｃの地点を両方地図に示しました。

慶長国絵図控図　周防国・長門国の一部



犬尾（居能）
（砂州の先端が犬の尻尾みたいだった）

鍋島（長門と周防の国境とされた島）
（現在は山口宇部空港の滑走路の一部）

妻崎神社には今も中野開作の堤防が残っています。

●江戸時代に造られた宇部の三大かんがい施設

① 常盤池

常盤池は、川上・宇部・小串を領地にしていた福原氏が、鵜の島・常盤・草江開作などのかんがいのために造らせたため池で、1697（元禄10）年に完成しました。もともとは川さえなかった常盤原と呼ばれた土地の南部に土手を築き、水を保つために周囲に松の木を植えて造られたこの常盤池によって、約400haの土地を新田にすることができたと言われています。

常　盤　池　の　全　景

② 御撫育用水（ごぶいくようすい）

1763（宝暦13）年、萩藩は財政立て直しのための中心になる役所として「撫育方（ぶいくかた）」を創設しました。撫育方は、藩内の産業育成や新田開発などを行いましたが、1792（寛政４）年、難工事の末、厚東川の水を厚南平野に引く用水を完成させました。地元の人たちが感謝を込めて呼んだこの御撫育用水は、改修されながら現在も使用されています。

御撫育用水の水は、厚南平野に網の目のように張り巡らされた水路に広がっていきます。

③ 新川

真締（まじめ）川は昔、宇部本川とも呼ばれ、江戸時代のはじめ頃は、樋ノ口（ひのくち）（右の写真）あたりからは西に向かって流れていました。

ところが、河口にあたる鵜の島や藤曲に開作ができると水の流れが悪くなり、大雨のたびに洪水がおきるようになりました。そこで、領主の福原氏は、1798（寛政10）年、のべ１万６千人を投じて、樋ノ口から真っ直ぐ海に向かって約１kmを開削し、新川を造りました。

新しく架け替えられた樋ノ口橋付近の真締川。ここから下流が新川です。

（7） 江戸時代の教育

長州藩は教育熱心なところでした。萩本藩には明倫館、徳山藩には鳴鳳館（のちの興譲館）、清末藩には育英館、長府藩には敬業館、岩国藩には養老館という藩校が設立され、藩士の教育と人材育成が行われました。また、毛利氏の家臣である各藩士は毛利氏から給領地を与えられていましたが、その石高に応じて自分の家臣（陪臣）をもっていました。多くの藩士たちは自分の給領地に郷校という学校を設立し、陪臣や場所によっては町人や百姓の子ども達の教育にあたりました。

宇部に多くの給領地をもっていた福原氏は、天保年間（1830～1844）に上宇部中尾の屋敷近くに「晩成堂」という郷校を設立しました。「晩成堂」はその後「菁我堂」と改称され、幕末には「維新館」として再建されました。７歳くらいから15歳くらいまで約100人が、朱子学を中心とした学問と弓・馬・刀などの武術をここで学びました。年２回春と秋には試験も行われていました。明治時代、外務大臣になった青木周蔵も、当時藤曲からこの維新館に通っていたそうです。

宇部で教育を行っていたのは「維新館」だけではありませんでした。19世紀に入るころから各地に次々と寺子屋がつくられ、百姓の子ども達の教育を行っていました。長州藩は大変寺子屋の多かった所で、幕末には1307カ所にあったとされています。

寺子屋では「よみ・かき・そろばん」が中心に教えられましたが、各教師によってさまざまな教材や学習内容が工夫されていたようです。女子に裁縫や茶道、三味線などを教えるところもありました。寺子（生徒）は、だいたい８歳前後で寺入り（入学）し、平均して６～７年間学んだようです。学費はお金だけでなく米や酒を持参しました。

コラム 伊能忠敬　宇部も測量

18世紀の半ばごろから、諸外国が日本近海に姿をあらわすようになると、幕府は日本沿岸の正確な地図を必要としました。そこで幕府は、1800（寛政12）年、西洋の測量術を学び高い技術を身につけていた伊能忠敬に、全国を測量し地図を作成するよう命じたのです。

商人であった忠敬は、50歳で家業を長男にゆずり、若いときからの夢を実現するために江戸で天文学や測量術を学びました。幕府から命じられた忠敬は、56歳から72歳までの間に地球一周分をこす距離を歩き、ほぼ全国を測量して多くの地図を作成しました。

忠敬が宇部に来たのは、1806（文化３）年。５月１日、阿知須方面から岐波村に入った忠敬らの測量隊は、２日には二班に分かれ、宇部村から藤曲村、沖ノ旦村、際波村の沿岸を測量し、原で宿泊、３日から４日にかけて小野田までの測量を終えています。（実はこの時、忠敬は発熱のため測量を弟子たちにまかせ、藤曲村で休養をとっていたそうです。）

忠敬は、1818（文政元）年、74歳でなくなりましたが、地図の作成は友人や弟子たちに引き継がれ、３年後、「大日本輿地全図」として完成しました。

（8） 幕末の長州藩と宇部

1853（嘉永６）年、浦賀に黒船があらわれて以来、国内の政治的な動きはあわただしくなっていきました。長州藩では尊皇攘夷運動が高まり、京都で尊王攘夷派の公家と結び勢力を広げていくとともに、軍備の増強に力を入れました。宇部の各村でも郷勇隊などの諸隊が結成され、武士だけでなく農民にも武器を持たせて農兵として幕府や外国との戦いに備えました。

1863（文久３）年、京都で大きな勢力をもってきた長州藩に対して、幕府は、薩摩藩、会津藩、公武合体派の公家たちは計略をはかり、長州藩と三条実美ら尊王攘夷派の公家を京都から追い出しました。

その翌年、長州藩は京都での勢力を取りもどすため京都に軍隊を送りましたが、この禁門の変（蛤御門の変）で長州軍を率いたのが、藩の家老であった福原越後、国司信濃、益田右衛門介です。福原越後は宇部村などに、国司信濃は万倉村などに多くの領地を持っていましたので、たくさんの宇部の武士や農兵が京都に行って戦いました。しかし、薩摩を中心とする幕府軍に大敗しました。その後、幕府は、各大名に長州藩を攻めるよう命じましたが、長州藩は禁門の変の責任者として家老三人を切腹させ、幕府に恭順の意をあらわしました。この戦いによって福原越後、国司信濃をはじめ多くの宇部の人々が亡くなりました。

尊皇攘夷運動も衰退し、すっかり力を失ったかに見えた長州藩でしたが、その後ふたたび反幕府の勢力が藩の実権をにぎり、倒幕のための軍事力強化がはかられました。高杉晋作の奇兵隊などの諸隊も再編され、武士だけでなく藩民が一致団結して幕府と戦う機運が高まりました。

そのようすを知った幕府は、1865（慶応元）年、再び長州を攻めるよう諸大名に命じました。四境戦争ともよばれ、翌年、大島口（瀬戸内海）・芸州口（広島との境）・石州口（島根との境）・小倉口（九州との境）の四カ所からいっせいに攻撃を受けたにもかかわらず、長州の人々は藩を守りきりました。福原越後のあとをついだ福原芳山も、干城隊の総督として宇部の人々とともに芸州口や小倉口で戦いました。

その後、長州藩は、この戦いの直前に結んだ薩長同盟により、薩摩藩とともに幕府を倒し、新しい日本をつくっていきました。

コラム　千林尼の石畳

世の中が大きく動いていた幕末、宇部に千林尼という尼僧がいました。床波に生まれた千林尼は、托鉢で集めた資金で、宇部各地のぬかるむ道に石畳を一枚一枚自分の手で敷き、川に橋をかけることに一生をささげました。

その後、道路の改修や舗装によって、彼女の業績は消えつつありますが、右の写真は、今も残る厚東の棚井から船木にぬける道の石畳です。